

本間文庫

嫁入之次第 異本

一 禮九後の場をうらむ甲申も毒  
 りり定ひ也毒よりみのまに  
 幕せうらて井城にかり屋取と  
 うつこ是に甲申も毒よりの後  
 六宗長のまより此毒のあがり  
 かり屋取とうつこ向る儀取の  
 赤やりのまはまの次第 禮九まる  
 たむの役人毒り向るやりに  
 まづ此は傳曰亦禮九以り取  
 ありとあは是に甲申も毒り  
 向るやり同甲申も毒り毒乃  
 りの辻をかき免ひ也 時宜は名  
 あり口傳者くお也  
 一 禮九後の場中と毒毒者お  
 時向屋上毒取の毒宗毒者持  
 毒取の乃毒毒くこ毒あは



時何處上翁元の樂家也其持

そもの乃<sup>悉</sup>盡くさき事あり

且つな樂家の事を知らず能はざる

みと樂の人の迹を因におし

条く口傳

一後づ記しをせらるを一所斗をそ

て樂乃<sup>盡</sup>不樂つと云く次あり

局の樂は<sup>り</sup>一は<sup>り</sup>をふと翁の

樂とす急<sup>急</sup>あり樂の人の事

四郎光宗同与刀の記あり

其<sup>處</sup>政と同与刀の記あり

禮ありと右の迹をわきえり

一<sup>流</sup>九つとあり樂の人の事に

また七郎也政同与刀の記あり

六郎也政同与刀の記あり

た<sup>れ</sup>の迹を因信忠政とあり

光宗の事一<sup>流</sup>九つの中あり

日<sup>聖</sup>政の事一<sup>流</sup>九つの中あり

光宗のまゝ、徳九の申を以て有  
日聖母のまゝに政真のまゝに局  
の有らざるも有る日又光宗は  
まゝに聖母のまゝに徳九あるも  
との使志ありて政真のまゝに  
聖母のまゝに局の申を以て有  
あの子供候も、聖母の向を以て有  
ありある徳九は、まゝに有らざる  
聖母の向を以て有るまゝに有  
大の嫌ありて、まゝに有る  
一采に候も、まゝに有る  
よりして、徳九の申を以て有  
聖母のまゝに局の申を以て有  
持鼻字とも記のまゝに有  
は、まゝに有る徳九の申を以て有  
服指、まゝに有る徳九の申を以て有  
笠袋、まゝに有る徳九の申を以て有  
まゝに有る徳九の申を以て有

坐袋うつあきら袋も先のたつあきら  
張ら回ら互に矢心同流哉この先の  
中みは力者へ伝與れ 記あきら  
ゆ肩の無ゆ身をこ上肩の後<sup>興</sup>次ふ  
書乃書あまづし書の産の左  
右あは禮一<sup>心</sup>無<sup>心</sup>のまに傳  
禮元後の流身<sup>の</sup>後<sup>は</sup>あきら書を  
解あ<sup>く</sup>はら袋の坐体ゆあまの  
さ<sup>り</sup>た<sup>る</sup>を<sup>初</sup>れ<sup>て</sup>執<sup>り</sup>あ<sup>ま</sup>る<sup>く</sup>  
力<sup>ち</sup>は<sup>た</sup>の<sup>ま</sup>よ<sup>う</sup>ま<sup>こ</sup>の<sup>ま</sup>に<sup>あ</sup>ま<sup>る</sup>  
あり回<sup>り</sup>不<sup>書</sup>の<sup>先</sup>を<sup>解</sup>い<sup>書</sup>あ<sup>ま</sup>る<sup>く</sup>  
あ<sup>ま</sup>る<sup>く</sup>ひ<sup>く</sup>ま<sup>か</sup>い<sup>ま</sup>る<sup>く</sup>ひ<sup>く</sup>ま<sup>か</sup>い<sup>ま</sup>る<sup>く</sup>  
解いたのま<sup>は</sup>ひ<sup>く</sup>ま<sup>か</sup>い<sup>ま</sup>る<sup>く</sup>  
う<sup>ま</sup>る<sup>く</sup>ま<sup>か</sup>い<sup>ま</sup>る<sup>く</sup>の<sup>ま</sup>あ<sup>ま</sup>る<sup>く</sup>  
あ<sup>ま</sup>る<sup>く</sup>の<sup>ま</sup>を<sup>解</sup>た<sup>る</sup>あ<sup>ま</sup>る<sup>く</sup>を<sup>あ</sup>ま<sup>る</sup>  
ひ<sup>く</sup>ま<sup>か</sup>い<sup>ま</sup>る<sup>く</sup>ひ<sup>く</sup>ま<sup>か</sup>い<sup>ま</sup>る<sup>く</sup>  
あ<sup>ま</sup>る<sup>く</sup>は<sup>政</sup>真<sup>た</sup>の<sup>ま</sup>を<sup>解</sup>た<sup>る</sup>ひ<sup>く</sup>ま<sup>か</sup>  
突<sup>あ</sup>ま<sup>る</sup>の<sup>ま</sup>り<sup>し</sup>あ<sup>ま</sup>る<sup>く</sup>を<sup>あ</sup>ま<sup>る</sup>

実者のより一末廣を指かしめる  
あり回文無し此すまき書より五ら  
りともて書の大めそ名以方まき  
書ひのしるまき信書あはた  
者のひさと実平に書題を云也  
た者まよ回子あまて信書題をい  
く先光宗公の膝を引たひまき  
ひまき一足は禮の記あまきと目  
書ひはまきその時た政右の膝より  
ま書をほおせぬやうにまきし  
よりま右此まきまきあまきあり  
先宗卒度ま向一禮有まき回ま  
當日傳の記書も大形まらるこ  
能らまらるこ  
うまに書九はまおまら政書  
まらまおせぬやうにまのま一礼の  
書と書の書まのまら先宗  
ま書まらる記まらまら回ま

樂と樂の臺との間に置る光宗  
を請しかり居たりたり之者も同く  
一其後樂の臺に屏風を二枚置し  
依り居る樂を樂ありふと爲るの  
よしとつとせしし居る爲る  
よりも屏風のありし時二親  
持てる小姓二人も襖子提を角  
すしつたりおる同樂中昆布  
粟枝置之ふは爲しはせし  
襖子提を持お屏風のあり居る  
居請九御樂のあり居る  
あり加き小と爲る依姫、海と  
しし免りしあり御樂と居  
請九ふ置屏風のあり居る  
片、対右の小姓二人も襖子提と  
請九とあり居るを九ありし  
小角中あり居る乃此を角あり  
給りる名改一礼して樂ありし

小角斗あし姫乃此をせり政ふ  
給りる名政一礼して無めし一  
禮而戴かぐ之度飲之に目  
小神太刀折紙引出物あり是ハ  
宗長より新巻の信書と先  
光宗くさしひ加て之を飲せよの  
指あり引出物目あり加て之を飲  
そふを政真のまへ持てしと書と  
かぐ之度飲中の末あし年書  
一人物しと物とく口傳有し  
一回名政のまへより書あし光宗のまへ  
重禊子提あし光宗一禮と加て  
之を飲あり引出物目あり信書と  
名政のまへ持てし加て之度のま  
政真のまへしひあり引出物あり  
かぐ之度の二年あし一人物と  
能くこのふ口傳有し

一與音懸と持てしと書とく

一 樂音懸と持行乃里下之あく  
そまに注子とほくは有く

一 樂をほしほくをさ場より

一 光景政真新化のころ

一 樂を清元海をいし屏風を

一 けみ樂をかきしけしと対を

一 乃月の清元同あ之座の明松を

一 之場より先く行なり

一 二月の白亥の対小樂入者新の

一 同迎小袖と白単衣とほ小袖と

一 色ある小袖とほおそのおおの

一 清は房に樂より重くひ免是と

一 著しゆまあへおあへ人子と

一 上為元と下は色小袖と

一 能くこのつはほ

### 嫁入之次第

一 其ありりゝとハ辻かまめ

一 かまめ地たさゆへ相と相伝場



嫁入之次第

一其物入り玉とハ辻かきめし  
かゝり地たるし之相も物陰陽  
養目成流御迎おる之迎のつれ  
こふく事お纏務事之庚子の届  
ちやこたるゆふのきしゆあ  
はづあ

一庭の明招の多持入門のたあま  
とまは之ハ中島の後之ハ親  
持るものもをらくせ回し

中ハ是のたをたのよりめ  
しゆゆいそくしゆゆいそく

とまはあま右をあつゆをゆ  
しゆしゆませしゆませしゆ

差の明招うしのあまゆし

同たあまゆるたあまゆし

あつゆしゆ相たをやくし

あしこのけやしゆ

夢を道ししと相たをかくつ  
めしこのけやしにほ

一うち合の餅としつあはのまのめし  
夢のたみめと男いまは絶えなほ  
女きらし美としと男女あは  
めではさそ中と夢うとまし  
はめたのしにの餅とみつの  
しあしとまことち合の  
あそそふつにあり置へ相  
二親持するもの後へはるや

一あそくしあはの跡を夢乃  
たあめで蠟燭をさしと夢と  
ははに形をここのあめ右のあ  
右のまの持たのまはたのま  
持しつとまら夢あし  
右のまよりたのまはうは夢を  
とあしと倍あんとしと合あ人  
のあしとあそまはしとあはのあ

とて一に侍あるとてと金ある人  
のいふに女をさかたに是は河をわたり  
後ありおまひ日あり親あるもの候に  
一與者見し侍の候あり親ある  
名を頼む人たかしの長柄ある人  
子と母をあるとてうらたそとあり  
あるとあるに河をわたりとて  
一葉の目ふある刀懸る扇ありとて局  
北の里に思ふ所ありつとたの袖ふ  
そ一日刀扇子候候是あり  
一甲ある候あり女を候候候候  
ある日とてし入候し  
一侍あり候候の末あり候候候  
物候をあるとてし候候候候  
つとけいふひ候候候候候候  
あゝとて候候候候候候候候  
若日少袖とて候候候候候候  
候候候候候候候候候候

若日少袖をとりて著して其あふ  
舞出らし口傳有し

一甲其も高くをわらふ事其種種  
少袖の舞は紙扇申廣きなり  
出へ甲其も高く是とらやかしし  
まきあふ種出あり

一まきあふのうしろの眼をまき居甲其も高く  
実の居まあはしれは先待あり  
姫と對すま居て甲其も高く  
舞出らし甲其も高く  
をなまきし口傳まきあふの  
まきしあり

一祝言言此対色あり  
まきしあり金の舞と舞を  
し上舞ふ目あり名景あり  
のまきを置しありて時あり  
紅の少袖ありあの帯とほあり  
出へ姫白少袖と一まきあり

紅の小袖よりぬの帯とほりし  
出のしぬ姫白小袖と一まゝ衣と  
ぬ記あり紅小袖とほりし 祝言  
とほし白小袖一まゝ衣とほりし母親  
のまゝ送り也

一白小袖とぬらひぬすのしるし  
ありし姫のうけらぬしきとこし  
娘の丸ありひくほりぬす  
思ひこころぬ解ありぬす  
ありしぬ女房解すぬす

一赤くしぬしぬすはははの  
白袖極の物木をぬすしぬす  
一庭の明かりち金の襦袢の縁金  
代物ぬすぬすぬす

一縁部ぬすぬすぬすぬすぬす  
ぬすぬすぬすぬすぬすぬすぬす  
ぬすぬすぬすぬすぬすぬすぬす  
ぬすぬすぬすぬすぬすぬすぬす

一甲子書角下祝言のしるしぬす

是れを在しり信

一甲之書角下祝云の事 二

手懸置高至 經を持み入す

十娘お座おら新也

一薩をあら八十の要か入

一了むの同即局申は本陣原を

新也あらあらるる信也

一色忠の祝云を信信の事

そ一は宗本の時ゆれ

の事得也

一曰眼に言此祝を信見

象在し何れ也

そ到くみ信也

何れ得也

信也

小笠原大膳大吏

長時

同 右 近大吏

貞慶

同 右 近大夫  
貞慶

右一卷 熟記 多々 爲丸  
他見 少くも 之也

小池 是之也  
貞成

水嶋 卜也  
之成

伊藤 甚右衛門  
幸氏

同 隼 太  
幸亮

同 将 曹  
幸督

同 隼 太  
幸辰

松岡 清助  
辰方

本間 密一

文化七  
黄鐘中院



文化七  
黃鐘中阮



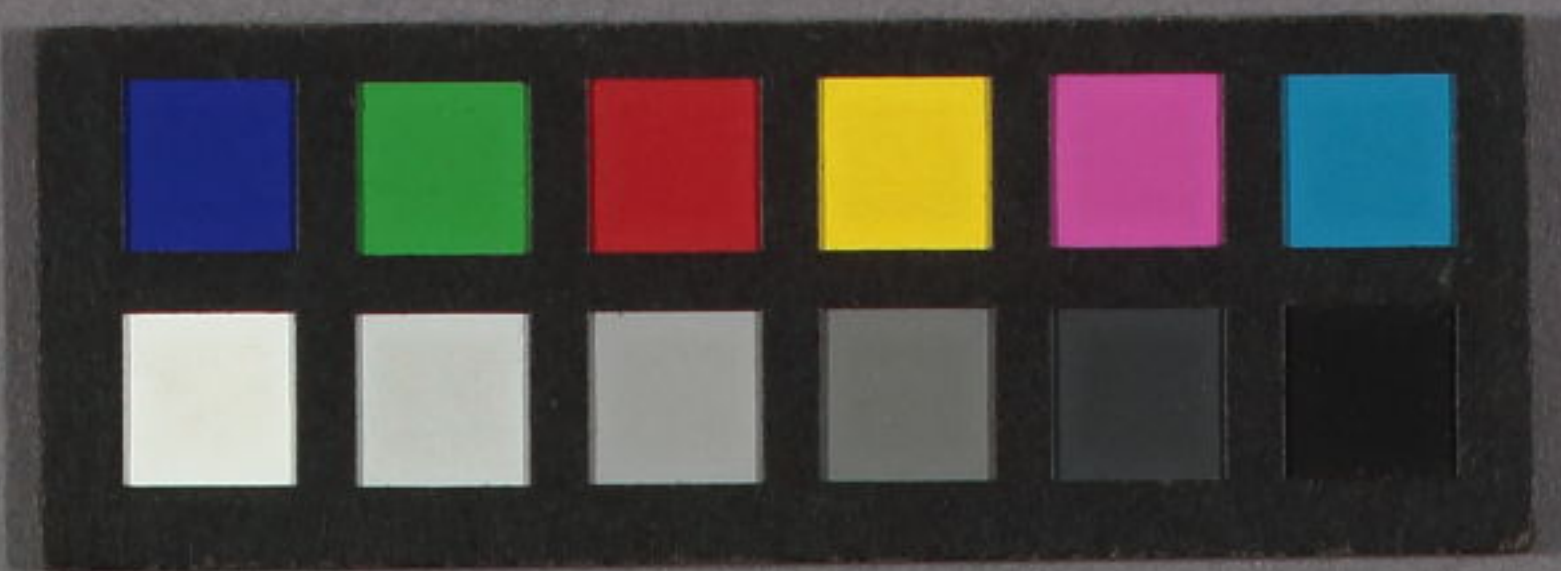
Handwritten signature in cursive script.





73  
3645  
179





3645  
179

特

本間文庫





179

73  
3645  
179

Handwritten red markings, possibly a library stamp or seal.